

いものである。と云つて學者を獎勵せられたのである。

(一六〇) 譬<sup>たと</sup>へば山を爲<sup>つく</sup>るが如し、末だ一簣<sup>き</sup>を成さずして止むは

吾が止むなり。譬<sup>たと</sup>へば地を平かにするが如し、一簣<sup>き</sup>を覆<sup>くつがへ</sup>すと雖も進むは吾が往くなり。(論語子罕)

(註) ○未だ一簣<sup>き</sup>を云々 簣は土籠である、もう一籠で山が出来上るのを止める事。

(大意) 道德修業の道は、自ら勉めねばならぬ事を云つたものである。山の將に成らんとする時に止むは、心倦んで自ら止めるからである。凸地を削りたる土を凹地に覆すは、功甚だ少いが其、の意は進むのである。進んで止まなかつたならば地は、遂に平かになるのである。

(一六一) 學んで思はざれば罔<sup>くら</sup>し。思うて學ばざれば厄<sup>やく</sup>し。(論語爲

政)

(大意) 學問の道は、博く學び、慎んで思はなければならぬ。學ぶのみで、心に沈思默考する所がなかつたならば、心慥<sup>くら</sup>くして得る所なく、又思ふのみで、學ぶ所がなかつたならば、何等古今の成敗に鑒<sup>かんが</sup>みる所がないから、極めて危険である。

(二六二) 十室の邑、必ず忠信丘の如き者あらむ。丘の學を好むに如かざるなり。(論語公冶長)

(註) ○忠信 淳厚朴實の性質。

(大意) 小邑の中にも忠信なること丘の様な者は澤山あらう。しかし學問しない故に凡人で終つて了ふ。自分は、常人と何等相違の點はないが、唯學を好んだ爲めに凡人たることを免れたのであるといつて、人を獎勵せられたのである。

(二六三) 朽木は彫るべからず、糞土の牆は朽るべからず、予に

於て何ぞ誅めむ。(論語公冶長)

(註) ○朽木 腐つた木。○彫る 彫刻する。○朽る 上塗りして立派にする事。○予 孔子の弟子の宰子のこ。と利口辯辭を以て名あり。

(大意) 門人宰子が晝寢をして修養を怠つた時に訓戒せられた言葉である。

(二六四) 子夏に謂つて曰く、汝、君子の儒たれ、小人の儒となる事なかれ。(論語雍也)

(註) ○君子の儒 道を明かにすること力むる儒者。○小人の儒 賣名を事とする儒者。

(大意) 子夏は孔門中文學者を以て稱せられた人で、名にはこる傾のあるのを見て、道を明にすることを以て第一とすべしと戒められたのである。

(二六五) 之を如何せむ、之と如何せむと曰はざる者は、吾之を如何ともする事なきのみ。(論語衛靈公)

(大意) 人、事を爲すに當つて、何うしたら善いかと良く考へないで妄りに事を爲す者は、之を何う教導しようも無い。毎事慎重熟慮する者にして始めて教誨する事が出来る。

(二六六) 文事は、必ず武備あり。武事有る者は必ず文備

あり。(子夏世家)

(大意) 文學の嗜ある者は必ず武術の備へがあり、武術の嗜ある者には必ず文學の備へがある。文武兩道は並立すべき者で一方に偏すべき者ではない。

(二六七) これを知る者は之を好む者に如かず、之を好むものは之を樂しむ者に如かず。(論語雍也)

(大意) 知るものは好む者に、好む者は樂しむ者に如かない事を述べ、道に進むの深淺を明にせられたのである。

(二六八) 孔子伯魚に謂つて曰く、鯉や吾聞く、以て人と終日倦

まさるべき者は其れ唯學か。其の容體は觀るに足らざるなり。其の勇力は憚るに足らざるなり。其の先祖は稱するに足らざるなり。其の族姓は道ふに足らざるなり。而して終に大名ありて以て四方に顯聞し、聲を後裔に流る者は、豈學の效に非ずや。故に君子は以て學ばざるべからず。其の容以て飾らざるべからず。飾らざれば貌無く、貌無ければ親を失ふ。親を失へば忠ならず。忠ならざれば禮を失ふ。禮を失へば立たず。夫れ遠くして、光ある

者は飾なり。近くして愈明かなるものは學なり。之を洿池に譬ふ。水潦注ぎ萑葦生ず。或は以て之を觀る事ありと雖も誰れか其の源を知らむや。(孔子家語。說苑建本篇)

(註) ○伯魚 孔子の子で字は鯉。○容體 なりかたち。○四方に顯聞す 四方に顯れ聞える事。○聲を後裔に流ふ 名聲を後世に傳ふ。○飾らざれば貌なし 外形を整ないと容儀が出来ない。○洿池 たまり水の池。○萑葦 雀は荻の十分に成長したもの、葦はあし。

(大意) 孔子は其の子の伯魚に向つて云ふには、鯉よ、私は人と終日語つて倦まない者は唯學問のみと聞いて居る。學問する者が容、儀は悪しく一向

觀るに足らず、其の勇力は畏るゝに足らず、其の先祖は平凡で稱揚するに足らず、其の一族は凡庸の者のみで言ふに足らなくても、終に大名を揚げて四方に喧しく傳へられ、名聲を後世に傳へるに至るのは、皆學問の效果ではないか。故に君子たる者は學問しなければならぬ。そして其の容儀を整へねばならぬ。容儀を整へないと外貌が悪しくなつて威儀と云ふ者が出來ない。威儀がないと、久しく親愛の道を保つ事が出來ない。親愛の情が無いと親切心即ち忠誠の心が無くなる。親切の心が無ければ禮儀を失つて了ふ。禮儀を失ふと世に立つ事が出來ない。故に容儀を整へる事が必要である。夫れ遠くから望んで何んとなく光彩の有るのは、容儀が整つてゐるからの事である。近づくに随つて明かなのは學問があるからである。學問

の道を水たまりの池に譬へて見ると、にはた水が池に注いで萑葦を生ぜしめめたのは、一見美なるが様であるけれども、誰れか源泉の無いことを知らない。現に一朝旱魃に遇へば忽ちにして涸れて了ふ、外貌のみ飾つて内心に向學問の効ないものは正に之と同一で、君子の取らない所、即ち内心外形共に練磨する事が必要である。

(二六九) 暴虎馮河し、死して悔ゆる無き者は、吾與くみせざるなり、必ずや、事に臨みて懼れ、謀を好みて成さむ者なり。

(註) ○暴虎 虎を徒手で生捕る事。○馮河 河を従歩にて渡る事。

(大意) 血氣の勇に驅らるる者と共にするを欲せず、深謀遠慮、以て事を成

遂ぐる人を得て事を爲ようと、門弟子路を抑へ訓戒せられた言葉である。

(一七〇) 中行を得て之に與せずんば必ず狂狷か。狂者は遊んで

取る。狷者は爲さざる所あり。(論語子路)

(註) ○狂者 志大であつて古人を慕ひ之に倣はんとするもの。○狷者 謹直にして守る所あつて不善を惡む故に爲ない所がある。

(大意) 中道を行ふ者は仲々得難い者である。得難い者である以上は狂狷の士を得て與にしよう。何故ならば、狂者は志高く進取の氣象あり、狷者は行正しく堅守の節操があるから、一は抑へ、一は勵まし、それで中道に進ましめんと欲するからである。

(一七一) 之を愛しては能く勞する事勿からむや。忠にして能く

誨ふる事勿からむや。(論語憲問)

(大意) 人を愛するも之を骨折らしめないのは真に愛したとは云へない。人に真に真心を披瀝するも、之を訓誨教導する事がなかつたならば真、の忠とは云へない。

(一七二) 子貢、人を方ぶ。子の曰く、賜や賢なるかな、我は則

ち暇あらず。(論語憲問)

(大意) 子貢が己の辯才に任せて人を比較評論するを見られた孔子は、子貢

お前は賢い者である。人を批評するだけの暇があるが、私は己を修むるに急でそんな事をする暇はない。人の事より己を修むる事を先にせねばならないといつて、深く子貢を訓戒せられたのである。

第五章 雜 (二〇三條終)

(一七三) 古の學者は己の爲めにし、今の學者は人の爲めにす。

(論語憲問)

(大意) 古の學者の學問するは、己の徳操を修養するにあつたが、今の學者は己を顧ず、却つて徒に博識を銜つて人に知られむ事のみを欲して居る。實に歎かはしき事である。

(一七四) 三軍も帥<sup>する</sup>を奪ふべきなり、匹夫も志を奪ふべからず。

(論語子罕)

(大意) 三軍は大勢である。しかし衆心一致しない時は其の將帥を奪ふ事が出来る。而し匹夫は微賤ではあるが苟も其の志守る所があれば、其の志を奪ふ事は出事ぬ。

(一七五) 子、川の上<sup>ほとり</sup>に在つて曰く、逝<sup>ゆ</sup>く者は斯<sup>か</sup>くの如きか、晝夜<sup>や</sup>を舍めず。(論語子罕)

(大意) 日月方に逝<sup>ゆ</sup>き、老の將に至らむとするのを河水に託して言はれたの

でゐる。

(一七六) 我、生れながらにして之を知れる者にあらず。古を好みて敏にして之を求むる者なり。(論語述而)

(大意) 人は我を生れながらにして道を知る者と云ふが其れは違つて居る。我は唯古の道を信じ、敏速に之を求めて得たもので、決して天才ではない。孔子が人に勉強する事を勧められたのである。

(一七七) 吾十有五にして學に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。

七十にして心の欲する所に従へども矩を踰えず。(論語爲政)

(註) ○十有五 有は又の義。○立 卓然として立つて動かざること。○耳

順 道進んで人の言の耳に入るや直ちに了解する事。○矩 法度。

(大意) 吾れ十五歳の時學問に志してから、孜孜として怠らずして三十歳の時には、強き信念の下に、道德の上に立つて動かない地位に進むことが出来た。四十歳の時には、如何なる事に出會つても、事理自ら明白にして少しも惑はない様になり。五十歳の時には、天の我に命ずる所以を知つて、之が實行に力めた。進んで六十歳に達した時には、學問愈熟して人の言を聞くも直ちに了解し、七十歳に至りては、勉めずして中り、思はずして得るの地位に達する事が出来た。



(二七六) 甚だしいかな、吾が衰へたるや。久しいかな吾復夢に周公を見ず。(論語述而)

(註) ○周公 名は旦、周の文王の子、武王の弟であつて、武王の子成を援けて周室の基礎を定めた聖人である。

(大意) 孔子壯年には常に周公の道を行はんとして周公を夢に見た程であつたが、今や衰老して久しく夢に見る事が無いと云つて、道を行ふ事の出來ないのを歎ぜられたのである。

(二七九) 賢なる哉回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人

は其の憂に堪へず。回は其の樂を改めず。賢なる哉回や。

(論語雍也)

(註) ○簞 竹で編んだ器で飯を入れるもの。○食 飯のこと。○瓢 ひさびさのこと。○陋巷 狭く不潔なる小路。

(大意) 顔回の貧窮に居ても、學を好み道を樂しむ心を改めないのを歎美せられたものである。

(二八〇) 晏平仲善く人と交る。久しうして人之を敬せり。(論語公冶長)

(大意) 人初めて交るときは、互に相敬するが、久しきに至ると、互に狎れ

て尊敬の念を失ふに至るものである、而し晏平仲は交ること愈久しうして、愈敬するので、人愈彼を尊敬した。

(二八二) 孔子曰く、吾が死したる後は則ち商は日に益し、賜は日に損せむと。曾子曰く、何の謂ぞや。子曰く、商は好んで己に賢る者と處り、賜は好んで己に若かざる者と處る。其の子を知らざれば其の親を視る。其の人を知らざれば其の友を視る。其の君を知らざれば其の使ふ所を視る。其の地を知らざれば其の草木を視る。故に曰く、善

人と居るは芝蘭の室に入るが如く、久しうして其の香を聞かず。即ち之と化す。不善人と居るは、鮑魚の肆に入るが如し。久しうして其の臭を聞かず。亦之と化す。丹に藏する所の者は赤く。漆に藏する所の者は黒し。是を以て君子は必ず其の與に處る所の者を慎しむ。(孔子家語。

說苑雜言篇)

(註) ○商 孔子門人子夏の名。○商 同じく子貢の名。○芝蘭 香草。○鮑魚 鮑の類に漬けて乾し臭氣ある魚類。

(大意) 孔子嘗て私の死後子夏は其の徳日に進むが子貢は却つて廢れるであ

らうと云はれたのを曾子が聞いて、何の事ですかと問うた。すると孔子は、左様子夏は常に己より賢い人と交際してゐるが子貢は己より愚かな者と交際して居る事に依つて知る事が出来る。何故とならば、其の子が如何なる人物であるか分らない時には其の父を見ると分る。父が有徳な人ならば其の子は先づ有徳な者と思つて間違ひない。父が悪人ならば其の子は先づ不良性を帯んだ者と思つてよい譯である。と同じ様に、其人を知らないならば其の友を視、其の君を知らなければ其の使ふ所の臣を視、其の地を知らなければ其處に生へてゐる草木を視れば分る者であるからである。故に常に善人と共に處るは香草のある室に入る様な者である。久しく其處に居れば其の芳香も感じない様になつて了ふ。是れ芳香に馴れて了つたのである。

又不善人と共に居れば、鮑魚のある店に入る様なもので、久しく其處に居れば其の惡臭も一向感じない様になる。是れ其の惡臭に馴れて了つたのである。同じ様に丹で藏する所の物は赤く、漆で藏する所の物は黒くなる。總べて共に處る所のもの如何に依るのであるから、君子は必ず其の共に居る所のものに注意するのである。

(二八三) 子、齊にありて韶を聞<sup>く</sup>。三月肉の味を知らず。曰く、  
圖らざりき、樂を爲すの斯に至らむとは。(論語述而)

(註) ○齊 春秋時代の國名で今の山東省附近一帯を占めてゐた。○韶 舜の樂で舜の徳業に象つて美を盡し善を盡した樂である。○三月 久しいこ

と、數に拘泥せられてはならぬ。○肉の味を知らず 心が音樂に執へられて了つたのである。

(大意) 韶樂の善美を歎美せられたのである。

(二八三) 子、韶を謂ふ。美を盡せり。又善を盡せり。武を謂ふ。美を盡せり、未だ善を盡さず。(論語八佾)

(大意) 韶武二樂を批評せられたものである。韶は舜の音樂である。舜は揖讓を以て天子となつた。故に羽旄を執つて舞ふは揖讓に象り、聲容共に備つて美を盡すばかりでない、其の實徳の善をも盡して居ると云つてよい。

武は周の武王の音樂である。武王は征代を以て天下を得た。故に其の樂に干戚を執つて舞ふは征代に象るので、其の聲容の盛んな事は、固より美を盡してゐるが、其の實徳に至つては、未だ善を盡してゐるとはいへない。

(二八四) 關雎は樂んで淫せず。哀かなしんで傷やぶらず。(論語八佾)

(註) ○關雎 詩經周最初にある詩である。文王の後の大姒が、己に勝る窈窕たる淑女を得て、文王の内助たらしめんとして案じ煩つた徳を頌した詩である。○淫 樂みが過ぎて度を失すること。○傷 哀が度を過ぎて和を害すること。

(大意) 關雎の詩の聲音の正しいのを批評せられたものである。

(一八五) 益者三樂、損者三樂あり。禮樂を節する事を樂み、人

の善を道ふ事を樂み、賢友多からむ事を樂むは益なり。

驕樂を樂み、佚遊を樂み、宴樂を樂むは損なり。(論語季氏)

(註) ○三樂 三つの好み望むの義で音はがう禮樂の音はがく、驕樂の音は

らくであつて皆意義が別である。○節 程よくする事。○驕樂 驕奢に流  
れ遊樂に耽る事。○佚遊 遊びに耽る事。

つまじやうな  
ふちやうか  
しきまつてやう

(大意) 人間の情として、好み愛する所は必ず有るが、其れには益になるも  
のと、損になるものがある。禮儀聲宴其の宜しきに適ひ、音樂亦其中  
庸を得るを樂み、人の善行あるや之を稱揚するを樂み、己より賢れる友の

多からんを樂むは皆益な樂みである。驕奢に流れ遊樂に耽るを樂み、遊樂  
を樂み、酒宴を開いて樂しむを樂むは皆損なる樂みである。

(一八六) 益者三友、損者三友あり。直を友とし、諒を友とし、

多聞を友とするは益なり。便辟を友とし、善柔を友とし、

便佞を友とするは損なり。(論語季氏)

(註) ○直 正直なる人。○諒 眞實にして偽らざる人。○多聞 博く古今

の事理に通ずる人。○便辟 威儀のみを重んじ習つて心根の直しくない人。

○善柔 顔色を令くして媚び諂ふ人。○便佞 口先のみ巧い事を云つて心

は不正な人。

(大意) 己に益ある友又損ある友は各三様ある。直、諒、多聞の人を友とするは益で、便辟、善柔、便佞の人を友とするは損である。正直なる人は、是を是とし、非を非とし、忠告をするに敢て憚らぬ者であるから、斯かる人を友とすれば己の悪を容易に知る事が出来て常に反省して善道に進む事が出来る。諒といつて、信實にして表裏なき人を友とせばそれに感化され己の邪よこしまな心も何時しか去つて誠實の人と爲る事が出来る。多聞の人を友とせば常に己の知らない事を聞く事が出来き智も廣まり徳も磨く事が出来る。故に以上は益ある友である。威儀のみを大切に於て正直の心無き者や、顔色を令よくして媚び諂ふ者や、口先のみ巧で實意の無い者を友とせば、己も

亦其等に感化せられて不知不識の間に修養を怠るに至る。故に以上は損な友である。

(一八七) 誰か能く出づるに戸に由らざらむ。何ぞ斯かの道に由る

ことなきや。(論語雍也)

(大意) 出づるに戸に由る事を知つて居るが、行は道に由るべきである事を知らないのを歎ぜられたものである。

(一八八) 鳥獸と共に群を同じうすべからず。天下道有れば丘與あづかり易へず。(史記孔子世家)

(大意) 鳥獸は世を避けて山林に隠るれども、人は鳥獸と同じくすることは出来ぬ。世を治め正に歸せしむるが余の目的であるから、天下に正道があるならば余は決して之を變へることはせぬ。

(一八九) 衆、之を惡むとも必ず察し、衆、之を好すとも必ず察す。(論語衛靈公)

(大意) 世人の好惡は私情に出づることが多くて直ちに信ずる事は出来ない。故に世人之を惡むも好みするも、善く察して後、信じなければならぬ。

(二九〇) 與に言ふべくして、之と言はざれば人を失ふ。與に言

ふべからずして、之と言へば言を失ふ。知者は人を失はず、亦言をも失はず。(論語衛靈公)

(大意) 言語は常に先方の人を標準として發しなければならぬ。與に言ふべき人とは談を交へ、與に言ふべからざる人には談を避く、之實に難い事である。唯知者のみ之を能くするのである。

(二九二) 詐を逆へず、不信を憶らず、抑も亦先づ覺る者は是賢か。(論語憲問)

(註) ○詐を逆ふ 人が己を欺きはしないかと推量すること。○不信を憶る

人が己を疑ひはしないかと思ふ事。

(大意) 人は己に向つて詐を云ふのではないかと推量もせず、己を信じないのではないかと心配もせず、誠意他に接する者は立派な者である。しかしそれとも誠意か詐偽か先づ覺り得て、人に欺かれぬ様にするは賢い者であらうか。

(二九二) 中庸の徳たるや、其れ至れり。民鮮きこと久し。(論語雍也)

(註) ○中庸 中は過不及無く中正を得る事 庸は何時までも變る事無きの徳。○鮮 人數の少い事。

(大意) 中庸は常に行ふべき徳で、先王の世では皆能く之を行つたのである。しかるに近古の民の之を行ふ事の少いのは己に久しい事であると歎ぜられたのである。

(二九三) 生れながらにして之を知る者は上なり。學びて之を知る者は次なり。困みて之を學ぶは又其の次なり。困みて學ばざるは、民斯れを下となす。(論語季氏)

(大意) 人の品に四等ある事を述べられたのである。生れながらにして何等の教育を受けないで道理を知るは聖人である。學んで知るは賢人である。



困んで知るは凡庸の人、困んで學ばないのは、人の中でも最劣等の者である。

(一四) 孔子雀を羅する者を見るに、得る所は皆黄口の小雀なり。夫子之に問うて曰く、大雀獨り得ざるは何ぞや。羅者曰く、大雀は善く驚いて得難けれども、黄口は食を貧りて得易し。黄口大雀に従へば則ち得ず。大雀黄口に従へば亦得べしと。孔子顧みて弟子に謂つて曰く、善く驚くは以て害に遠ざかる。食を利して患を忘るゝは自ら其

の心なり。而してただ従ふ所を以て禍福を爲す。故に君子は其の従ふ所を慎む。長者の慮をもちふれば、則ち身を全うするの階あり。小者の戇たうに隨へば、則ち危亡の敗あるなり。(孔子家語)

(註) ○雀を羅する 網を張りて雀を捕ふ。○黄口 小鳥は嘴黄なり。○長者 賢明にして有徳の者。○戇たう 愚かな事。

(大意) 孔子が鳥網を張りて雀を捕へるのを見るに、皆小さい雀許りであつた。何故大きな雀は捕へられないのかと尋ねると、それは貴方あなた、親雀は一寸した事に驚いて逃げて了ふので仲々捕れません、小さいのは食物を欲し

がりますから餌でつれば善く捕へられますと答へた。之を聞いた孔子は門人の方を振返つて言ふのには、諸子よ、今の話を聞いたか、何事にも戦々兢兢として一寸した事にも氣を留めさへすれば、害に遠ざかるが、好餌に目がくれて患を忘れると飛んだ災難に罹る之は皆自分の心に因るのである。故に唯従ふ所に因つて禍にも幸にもなる者であるから、君子は其の従ふ所を注意するのである。常に長者に従つて其の慮る所に依れば身を全うする事が出来る。小人に従つて其の暗愚な心に依れば敗亡して了ふ。従ふ所を慎まねばならぬ事は實に明かな事ではないか。

(一九五) 論の篤きには是れ與せば、君子者か、色莊者か。

(註) ○色莊者 外貌のみ嚴かにしてゐる人。

(大意) 議論の篤實深切なるを以て、直ちに偉大なる人物と信ずるのは甚だ謬である。それが果して言行一致せる君子であるが、或は外貌のみ嚴かにしてゐる色莊者であるか分らないからである。故に人を觀るのは、其の行事と心術とを考へて定めねばならぬ。

(一九六) 徳有る者は必ず言有り、言有るもの必ずしも徳有らず。

仁者は必ず勇有り、勇者は必ずしも仁有らず。(論語憲問)

(大意) 徳を積んだ人は必ず善い言葉を發する者であるが、善い言葉を發する者は必ずしも徳が有るとは云へない。仁者は必ず勇氣があるが、勇氣の

あるものは必ずしも仁徳があるとはいへぬ。

(一九七) 士にして居を懷おもふは以て士となすに足らず。(憲問第十四)

(註) ○居 家居の安逸である。

(大意) 四方に遊んで天下を救済せんと思ふ者は眞の士である。然るに家居の安逸を冀ふ様な者は婦女子に類する者で士たるの價値は無い。

(一九八) 士、道に志ざして、惡衣、惡食を恥づる者は未だ與に議はかるに足らざるなり。(論語里仁)

(一九九) 子貢、問うて曰く、何如なる斯れ士と謂ふべきか。子曰く、己を行ふに恥あり、四方に使用して君命を辱しめざるを士と謂ふべし。(論語子路)

(大意) 子貢の何んな人を士と謂ふ事が出事ますかとの間に孔子對へて曰く、己の行爲に於て及ばない所を恥ぢて孜々しとして勉み、四方隣國に使者として行つて君命を辱しめない人之を士と云ふのであると。

(二〇〇) 知者は惑はず。仁者は憂へず。勇者は懼れず。(論語子罕)

(大意) 知者は理を見る事明かでき理非曲直を辯ずるから物事に惑はない。

仁者は心寛かで天命を知り仁に安んじて其の樂を改めないから憂がない。勇者は、果斷義を見て必ず爲す剛毅の心がある故に物事に懼れない。

知者樂水 仁者樂山 知者動 仁者

✓(III) 知者は水を樂み、仁者は山を樂む。知者は動き、仁者は靜なり。知者は樂み、仁者は壽し。(論語雍也)

(註) ○知者云々 知者はあらゆる事物の道理に通じ其れに依つて國家を治め様とするものである故に其の性格は水の流れて止む事なきに似て居るから水を樂むのである。○仁者云々 仁者は義理に安んじ重厚にして、外物の爲めに移されない自然を樂み天真を全くしようとする者である。故に其性格は安固にして動かない山に似てゐるから山を樂むのである。○知者は

動き 知者は才智を以て自ら進むから常に活動する。○仁者は靜なり 義理に安んじて、私欲の爲めに心を亂されないから常に靜かである。○知者は樂み 道理に明かであるから事物に苦められると云ふ事がない故に常に喜び樂むのである。○仁者は壽し 私欲の爲めに迷はされる事がないから從容として能く天真を完うする事が出来る。故に長命である。

(大意) 仁者と知者との性格の異同を述べたのである。

✓(III) 不仁者は以て久しき約に處るべからず、以て長く樂に處るべからず。仁者は仁に安んじ、智者は仁を利す。(論語里仁)

(大意) 不仁者は長く困難或は富貴の位置に居る事は出来ない。困難の位置に居れば悪事を行ひ、富貴の位置に居れば驕奢に流れるからである。仁者は仁を守つて安心して外に動かず。智者は身に利益あるものと思つて仁を守るものである。

哀公孔子に問うて曰く、

(1103) 哀公孔子に問うて曰く、智者は壽なるか、仁者は壽なるか。孔子對へて曰く、然り人に三死あり。而して其の命に非るなり。己自ら取るなり。夫れ寢處時しんじよあらず、飲食節あらず、逸勞度やまひに過る者は疲共やまひに之を殺す。下位に

居りて而して上其の君を干し、嗜欲厭く事なくして求めて止まざる者は刑共に之を殺す。少を以て衆を犯し、弱を以て強を侮り、忿怒類ならず、動くに力を量らざる者は兵共に之を殺す。此の三者の死は命に非ざるなり、人自ら之を取るなり。夫の智士仁人の如きは、身を將おこなふに節あり。動靜義を以てし、喜怒時を以てし、其の性を害する事無し。壽を得と雖も亦宜うべならずや。(孔子家語)

(註) ○壽 命長き事。○其の命 運命或は天命。○自ら取る 自ら招く。○寢處 寢起きする事。○逸勞 安樂と苦勞。○其の君を干す 自身の主

君を凌ぐ事。○忿怒 怒る事。○身を將ふに 起居動作が引締つてゐる。

(大意) 魯の哀公は孔子に向つて、智者、仁者何れが命長きものかと尋ねた時、孔子は對へて曰く、左様命長き者であります。而して人には三つの死があります。其れは天命ではなくて自ら招く者であります。日常起床就寢にきまりなく、飲食に節制なく、苦樂共に度を過ぎる者は病氣に罹つて斃れます。低い位にありながら主君を蔑にし、嗜欲を擅まにして厭く事無く、常に事物を求めて止まない者は結局罪を犯し刑罰に觸れて斃れます。小勢でありながら、大勢に勝たんとし、弱い身を以て、強者を侮り他に類する者無きまでに怒り、事を爲すに己の力量を考へ見ない者は、寇の爲めに殺されます。此三つの死は何れも天命ではなくて自ら招く禍であります。

彼の智者仁者は起居動作盡く引締つて居て、活動するも靜止するも程善くし、喜ぶべき時怒るべき時に喜び怒り、決して自己の本性を害する事は無い。故に長命するも亦道理な事ではありませんか。終

孔子贊

仰之彌高。鑽之彌堅。瞻之在前。忽焉在後。夫子循循然善誘人。博我以文。約我以禮。欲罷不能。既竭吾才。如有所立卓爾。雖欲從之。未由也已。

顧淵

自有生民以來。未有孔子也。

孟軻

孔子孔子。大哉孔子。孔子以前。既無孔子。孔子以後。更無孔子。孔子孔子。大哉孔子。

米芾

玉振金聲。茲集大成。陰陽合德。日月均明。今古天下。聖哉至誠。

林羅山

附錄

孔子的教義原文

第一 哲學宗教 (二十三條迄)

○(一) 天生德於予。桓魋其如予何。

○(二) 子曰莫我知夫。子貢曰。何為其莫知子也。子曰。不怨天。不尤人。下學而上達。知我者其天乎。

○(三) 人能弘道。非道弘人。

附錄

人事、道理、天理

(四) 吾道一以貫之。

(五) 道二。仁與不仁而已矣。

(六) 朝聞道。夕死可矣。

(七) 樊遲問仁。子曰愛人。

(八) 民之於仁也。甚於水火。水火吾見蹈而死者矣。未見蹈仁而死者也。

(九) 剛毅木訥近仁。

(十) 仁遠乎哉。我欲仁斯仁至矣。

(二) 司馬牛問仁。子曰。其言也訥。曰其言也訥。斯可謂之仁已乎。子曰。爲之難言之得無訥乎。

(三) 仲弓問仁。子曰。出門如見大賓。使民如承大祭。己所不欲勿施於人。在

邦無怨。在家無怨。

(三) 顏淵問仁。子曰。克己復禮爲仁。一日克己復禮。天下歸仁焉。爲仁由己

而由人乎哉。顏淵曰。請問其目。子曰。非禮勿視。非禮勿聽。非禮勿言。非禮勿動。顏淵曰。回雖不敏請事斯語矣。

(四) 樊遲問仁。子曰居處恭。執事敬。與人忠。雖之夷狄不可棄也。

(五) 子張問仁於孔子。孔子曰。能行五者於天下爲仁矣。請問之。曰。恭寬信敏惠。恭則不侮。寬則得衆。信則人任焉。敏則有功。惠則足以使人。

(六) 巧言令色鮮矣仁。

(七) 里仁爲美。擇不處仁。焉得知。

(八) 苟志於仁矣。無惡也。



(一九) 子曰。賜也女以予爲多學而識之者與。對曰然。非與。曰非也。子一以貫之。

(二〇) 性相近也。習相遠也。

(二一) 唯上知與下愚不移。

(二二) 季路問事鬼神。子曰。未能事人。焉能事鬼。曰敢問死。曰。未知生。焉知死。

(二三) 祭如在。祭神如神在。

第二 倫理道德 (一一四條迄)

(二四) 德不孤。必有隣。

(二五) 道聽而塗說。德之棄也。

(二六) 巧言亂德。小不忍則亂大謀。

(二七) 子貢問曰。有一言而可以修身行之者乎。子曰。其恕乎。己所不欲勿施於人。

(二八) 或曰。以德報怨何如。子曰。何以報德。以直報怨。以德報德。

(二九) 驥不稱其力。稱其德也。

(三〇) 吾嘗終日不食。終夜不寢。以思。無益。不如學也。

(三一) 學而時習之。不亦說乎。

(三二) 德之不修。學之不講。聞義不能徙。不善不能改。是我憂也。

(三三) 子張問崇德辨惑。子曰。主忠臣徙義崇德也。愛之欲其生。惡之欲其死。

既欲其生。又欲其死是惑也。

(三) 林放問禮之本。子曰大哉問。禮與其奢也寧儉。喪與其易也寧戚。

(三) 生事之以禮。死葬之以禮。祭之以禮。

(三) 言忠信。行篤敬。雖蠻貊邦行矣。言不忠信。行不篤敬。雖州里行乎哉。

~~(三)~~

聰明睿智。守之以愚。功被天下。守之以讓。勇力振世。守之以法。富有四海。守之以謙。是所謂損之又損之道也。

(三) 見善如不及。見不善如探湯。吾見其人矣。吾聞其語矣。隱居以求其志。

行義以達其道。吾聞其語矣。末見其人也。

(三) 見義不為無勇也。



(四) 飯疏食。飲水。曲肱而枕之。樂亦在其中矣。不義而富且貴。於我如浮雲。

(四) 人之生也直。罔之生也幸而免。

(四) 其言之不怍。則為之也難。

◎

(四)

富與貴。是人之所以欲也。不以其道得之不處也。貧與賤。是人之所以惡也。不以其道得之不去也。君子去仁惡乎成名。君子無終食之間違仁。造次必

於是。顛沛必於是。

(四) 貧而無怨難。富而無驕易。

(四) 邦有道危言危行。邦無道危行言孫。

(四) 當仁不讓於師。

(四) 主忠信。毋友不如己者。過則勿憚改。

(四) 過而不過。是謂過矣。

(四) 已矣乎。吾未見能見其過。而內自訟者也。

(五) 躬自厚。而薄責於人。則遠怨矣。

(六) 人無遠慮。必有近憂。

(七) 不患人之不己知。患其不能也。

(八) 成事不說。遂事不諫。既往不咎。

(九) 不患人之不己知。患不知人也。

(十) 見賢思齊焉。見不賢內自省也。

(十一) 禦人以口給。屢憎於人。

(十二) 以約失之者鮮矣。

(十三) 古者言之不出。恥躬之不逮也。

(十四) 子路盛服見於孔子。子曰。由是偃々者何也。夫江始出於岷山。其源可以

濫觴。及其至于江津。不舫舟。不避風。則不可以涉。非唯下流水多邪。

今爾衣服既盛。顏色充盈。天下且孰肯以非告汝乎。

(十五) 良藥苦於口。而利於病。忠言逆於耳。而利於行。湯武以諤々而昌。桀紂

以唯々而亡。君無爭臣。父無爭子。兄無爭弟。夫無爭婦。士無爭友。而

無其過者未之有也。故曰。君失之臣得之。父失之子得之。兄失之弟得之。

夫失之婦得之。己失之友得之。是以國無危亡之兆。而家無悖亂之惡。父

子兄弟無失。而交友無絕也。

(十六) 凡持滿而能久者。未嘗有也。

(十七) 凡事豫則立。不豫則廢。言前定則不跲。事前定則不困。行前定則不疚。

道前定則不窮。

(六三) 在下位不獲乎上。民弗可得而治矣。獲乎上有道。不信乎友。不獲乎上矣。信乎友有道。不順乎親。不信乎友矣。順乎親有道。反諸身不誠。不順乎親矣。誠身有道。不明乎善。不誠乎身矣。誠者天之道也。誠之者人之道也。夫誠不勉而中。不思而得。從容中道。聖人之所以定體也。誠之者擇善。而固執之者也。

(六四) 言人之惡。非所以美己。言人之枉。非所以正己。故君子攻其惡。無攻人之惡。

(六五) 不觀於高崖。何以知顛墜之患。不臨深泉。何以知沒溺之患。不觀巨海。何以知風波之患。失之者其不在此乎。士慎此三者。則無累於身矣。

(六六) 康子患盜。孔子曰。苟子之不欲。雖賞之不竊。

(六七) 老者安之。朋友信之。少者懷之。

(六八) 有朋自遠方來。不亦樂乎。

(六九) 事君敬其事。而後其食。

(七〇) 子夏問孝。子曰色難。有事弟子服其勞。有酒食先生饌。曾是以爲孝乎。

(七一) 孟武伯問孝。子曰。父母唯其疾之憂。

(七二) 子游問孝。子曰。今之孝者是謂能養。至於犬馬。皆能有養。不敬何以別乎。

(七三) 事父母幾諫。見志不從。又敬不違。勞而不怨。

(七四) 父母之年不可不知也。一則以喜。一則以懼。

(五) 葉公語孔子曰。吾黨有直躬者。其父攘羊而子證之。孔子曰。吾黨之直者異於是。父為子隱。子為父隱。直在其中矣。

(六) 父在觀其志。父沒觀其行。三年無改於父之道。可謂孝矣。

(七) 惟仁者能好人。能惡人。

(八) 夫仁者己欲立而立人。己欲達而達人。

(九) 志士仁人無求生以害仁。有殺身以成仁。

(十) 歲寒然後知松柏之後凋也。

(十一) 質勝文則野。文勝質則史。文質彬彬。然後君子。

(十二) 君子不器。

(十三) 君子欲訥於言。而敏於行。

(十四) 子貢問君子。子曰。先行其言。而後從之。

(十五) 為子不重則不威。學則不固。主忠信。無友不如己者。過則勿憚改。

(十六) 司馬牛問君子。子曰。君子不憂不懼。曰。不憂不懼。斯謂之君子矣乎。

子曰。

內省不疚。夫何憂何懼。

(十七) 君子不以言舉人。不以人廢言。

(十八) 君子恥其言。而過其行。

(十九) 君子矜而不爭。群而不黨。

(二十) 人不知而不愠。不亦君子乎。

(二十一) 君子疾沒世而名不稱焉。

(九二) 君子病無能焉。不病人之不己知也。

(九三) 君子謀道不謀食。耕也餒在其中矣。學也祿在其中矣。君子憂道不憂貧。

(九四) 君子食無求飽。居無求安。敏於事而慎於言。就有道而正焉。可謂好學也已。

(九五) 顏回問君子。孔子曰。愛近仁。度近智。爲己不重。爲人不輕。君子也夫。回曰。敢問其次。子曰。弗學而行。弗思而得。小子勉之。

(九六) 君子有九思。視思明。聽思聰。色思溫。貌思恭。言思忠。事思敬。疑思問。忿思難。見得思義。

(九七) 君子有三思。不可不察也。少而不學。長無能也。老而不教。死莫之思也。有而不施。窮莫之救也。故君子少思其長。則務學。老思其死。則務教。

有思其窮。則務施。

(九八) 君子有三畏。畏天命。畏大人。畏聖人之言。小人不知天命而不畏也。狎大人。侮聖人之言。

(九九) 君子有三戒。少之時血氣未定。戒之在色。及其壯也血氣方剛。戒之在鬥。及其老也血氣既衰。戒之在得。

(一〇〇) 侍於君子有三愆。言未及之而言。謂之躁。言及之而不言。謂之隱。未見顏色而言。謂之瞽。

(一〇一) 君子有三恕。有君不能事。有臣而求其使非恕也。有親不能孝。有子而求其報非恕也。有兄不能敬。有弟而求其順非恕也。士能明於三恕之本。則可謂端身矣。

(101) 君子有三患。未之聞患弗得聞。既得聞之患弗得學。既得學之患弗能行。有其德而無其言。君子恥之。既得之而又失之。君子恥之。地有餘而民不足。君子恥之。衆寡均而人功倍己焉。君子恥之。

(102) 子路問於孔子曰。君子亦有憂乎。子曰無也。君子之修己也。其未得之。則樂其意。既得之。又樂其治。是以君子有終身之樂。無一日之憂。小人則不然。其未得也。患弗得之。既得之。又恐失之。是以有修身之憂。無一日之樂也。

(103) 君子周而不比。小人比而不周。

(104) 君子成人之美。不成人之惡。小人反是。

(105) 君子泰而不驕。小人驕不泰。

(106) 君子易事而難說也。說之不以道不說也。及其使人也器之。小人難事而易說也。說之雖不以道說也。及其使人也求備矣。

(107) 君子和而不同。小人同而不和。

(108) 君子上達。小人下達。

(109) 君子而不仁者有矣夫。未有小人而仁者也。

(110) 君子不可小知。而可大受也。小人不可大受。而小知也。

(111) 君子求諸己。小人求諸人。

(112) 君子喻於義。小人喻於利。

(113) 顏回問小人。孔子曰。毀人之善以爲辯。狡訐懷詐以爲智。幸人之有過。恥學而羞不能小人也。

### 第三 政治經濟 (一四七條迄)

(二五) 爲政以德。誓如北辰居其所。而衆星共之。

(二六) 齊景公問政於孔子。孔子對曰。君君。臣臣。父父。子子。

(二七) 道之以政。齊之以刑。民免而無恥。道之以德。齊之以禮。有恥且格。

(二八) 夫道者所以明德也。德者所以尊道也。是以非德道不尊。非道德不明。雖有國之良馬。不以其道服乘之。不可以取道里。雖有博地衆民。不以其道治之。不可以致霸王。

(二九) 齊景公問孔子曰。昔秦穆公國小處辟。其霸何也。對曰。秦國雖小其志



成蹊大生

大正十一年十一月十八日印刷

孔子及其思想奥付  
定價金壹圓五拾錢

著者 鈴木周作

發行者 辻本卯藏

印刷者 中野鉄太郎

印刷所 東洋印刷株式會社

東京市神田區北神保町十一番一  
電話九段東一三八一五番

弘道館

不許複製



發行所

<p>東京帝國大學文科大學教授 文學博士 深作安文先生著</p>	<p>京都帝國大學文科大學教授 文學博士 藤井健治郎先生著</p>	<p>東京帝國大學文科大學教授 文學博士 桑木巖翼先生著</p>	<p>武藏高等學校教頭 山本良吉先生著</p>	<p>東京帝國大學文科大學教授 文學博士 中島力造先生著</p>	<p>東京帝國大學文科大學教授 文學博士 吉田熊次先生著</p>	<p>文學博士 遠藤隆吉先生著</p>
<p>國民道德要義</p>	<p>主觀道德學要旨</p>	<p>現代思潮十講</p>	<p>わが民族の理想</p>	<p>教育的倫理學講義</p>	<p>教育的倫理學</p>	<p>東洋倫理學</p>
<p>洋裝菊判上製 正價金三圓五十錢 送料金十八錢</p>	<p>洋裝菊判上製 正價金三圓五十錢 送料金十八錢</p>	<p>洋裝菊判上製 正價金二圓三十錢 送料金十二錢</p>	<p>洋裝菊判上製 正價金四圓五十錢 送料金十錢</p>	<p>洋裝菊判上製 定價金三圓三十錢 送料金十二錢</p>	<p>洋裝菊判上製 正價金三圓 送料金十二錢</p>	<p>洋裝菊判上製 正價金二圓五十錢 送料金十二錢</p>
<p>發行所 弘道館 東京市神田區北田一八番地 電話一八五</p>						

503

164

終